

令和2年度(2020)

地方独立行政法人北海道立総合研究機構
花・野菜技術センター一年報

令和3年6月

地方独立行政法人北海道立総合研究機構
農業研究本部 花・野菜技術センター

令和2年度
花・野菜技術センター一年報
目次

I 総説	
1. 沿革	1
2. 位置および土壌	2
3. 用地および利用区分	2
4. 機構（令和3年3月31日現在）	2
5. 職員	3
6. 収入支出決算額	4
7. 建物	5
8. 施設および備品	5
II 作況	
1. 気象概要	6
2. 野菜類の生育状況	6
III 事業の推進方向と成果の概要	
1. 研究部	9
2. 技術普及室	11
IV 試験研究および地域支援等活動の課題名	
1. 花き野菜に関する試験	12
2. 栽培環境に関する試験	13
3. 病害虫に関する試験	14
4. 地域支援に関する試験等	14
V 研修事業の概要	
1. 概要	15
2. 研修事業の推進	15
3. 北海道花き・野菜技術研修	16
4. 研修ほ場等作付概要	16
VI 研究発表並びに普及事項	
1. 研究報告・資料	17
2. 印刷刊行物	19
3. 普及事項	19
VII その他	
1. 職員の研修	20
2. 見学・参観	20
3. 研修生の受入れ（研修事業以外）	20
4. 委員会活動	21
5. 公開デー2020	22
6. 講師等の派遣	22
7. 各種委員	22
VIII 自己点検への対応	23

I 総 説

1. 沿 革

(1) 設立の趣旨と経過

当センターは、本道農業の戦略作物である花き・野菜生産の一層の振興を図るため、試験研究部門とその技術を普及する部門を一体化し、相互の連携の下に総合的な機能を果たす拠点施設として、平成8年度に設立された。

試験研究では、北海道立総合研究機構の農業試験場における花き・野菜の中核的研究機関として、関係場との分担を図りながら、新品種の開発、栽培技術および流通技術等に関する試験を効率的に推進し、また、技術普及・研修では、開発された新技術を重点的かつ効率的に普及指導し、地域への定着を図るとともに、生産者や指導者等に対する技術指導はもとより、「開かれた試験場」として、一般消費者をも対象とした啓発研修を行うとしている。

平成4年度に調査費、同5年度には設計費が予算化された。平成6年度より道立滝川畜産試験場内に研究棟などの建設、ほ場の整備が開始され、同7年度には附属施設、研修寮、温室などすべての施設の建設と備品の納入も完了した。一部、幹線などの舗装工事、外構工事等を平成8年度に残したが、同年3月には「北海道立農業試験場条例」を改正、4月に職員が配置され、業務を開始した。8月30日には、北海道知事、滝川市長、農業団体など関係者を迎え、開所式を開催した。平成9年度より本格的に試験研究、研修などを開始、平成10年度以降もハウスの移転、新設など環境の整備が進み、着実に成果をあげている。

(2) 組織機構の変遷

平成8年4月に場長以下、総務部、研究部、専門技術員室の2部1室体制でスタートしたが、場長および研修主査を除く総務部は隣接する滝川畜産試験場との兼務体制であった。

平成12年4月、道立畜産試験場の再編に伴い、場長以下、総務部の兼務体制が解かれ、専任の体制となった。

また、道立農業試験場の機構改革により、専門技術員室は発展的に解消し、技術普及部が新設され、技術普及体制の強化が図られた。

平成22年4月、22道立試験研究機関を統合し創設された地方独立行政法人北海道立総合研究機構の農業研究本部の一員として、3グループからなる研究部と総務課の体制で再スタートし、道所属の普及指導員が駐在する技術普及室が設置された。

(3) 試験研究体制と推進方向

研究部は、平成8年度は花き2科、野菜2科、土壌肥料科、病虫科の6科体制であったが、平成12年度に花き科、野菜科、園芸環境科、病虫科の4科体制となった。平成18年度には園芸環境科を栽培環境科と改称した。平成22年度からは、旧花き科・野菜科を統合した花き野菜グループ、旧栽培環境科・病虫科からなる生産環境グループに加えて、旧技術普及部の研修・地域対応と旧総務部管理科機能を併せた技術研修グループからなる3グループ体制となった。令和2年度からは生産環境グループの名称が生産技術グループに変更された。

当センターは、花き・野菜に関する試験研究を行う専門場に位置づけられ、品種・栽培部門と栽培環境・病害虫の環境部門が一体化した総合的な試験研究を効率的に推進することが期待されている。

また、花き・野菜の試験研究の中核的機関として、農業研究本部、各場との連携の下に花き・野菜に関する試験研究の企画調整や地域対応研究も担っている。

(4) 研修体制および技術普及と推進方向

当センターにおける重要な業務として、試験研究とともに技術研修と技術普及がある。

技術研修は、試験研究で開発または体系化された新技術の生産現場への速やかで効率的な伝達普及を目的として、農業技術指導者、中核的農業者などを対象に実施している。長期的な専門研修から市民セミナーまで幅広い研修内容となっており、研究員と普及指導員、各農試の協力のほか、外部講師を招き指導している。研修事業に対応した研修寮、技術研修室、研修用ほ場・温室が整備されるとともに、研修担当者が配置され平成8年度の準備期間を経て、平成9年度から本格的に研修事業を開始した。平成12年度に研修業務が総務部から新設の技術普及部

に移管し、さらに、平成22年度には研修事業と技術支援、旧管理科業務を担う技術研修グループが新設され研究部にこれら業務が移管することとなった。

そのほか、当センターには開放実験室、展示温室、展示ほ場も設置され、農業関係者ばかりでなく、一般道民にも「開かれた試験場」として利用できる試験研究機関を目指している。

普及部門は、平成8年度より専門技術員室（滝川専技室）が設置され、普及支援活動や技術相談の機能を果たしてきたが、平成12年度に専門技術員と研究職員および研修担当者からなる技術普及部が新設され、普及・技術支援・研修に対応してきた。さらに、研究部と技術普及部で組織された技術体系化チームによる新技術の普及推進体制が整えられた。平成18年には農業改良助長法の改正により、専門技術員が普及指導員へ一元化されるとともに道立農試機構改正による技術普及部の体制も変更した。

また、平成22年度より、独法化による技術普及部の廃止にともない技術普及室が新設され、道所属の普及指導員が駐在して普及業務を担っている。

2. 位置および土壌

滝川市東滝川735番地

北緯43° 35′ 東経141° 59′

滝川市街より空知川に沿って東北に約8km、JR根室本線東滝川駅より約1kmにある。中央バス滝川ターミナルより赤平芦別方面行きバスに約13分間乗車し、花・野菜技術センター入口で下車、徒歩15分（約1km）。道央自動車道滝川インターチェンジより国道38号線を経由し車で5～6分。

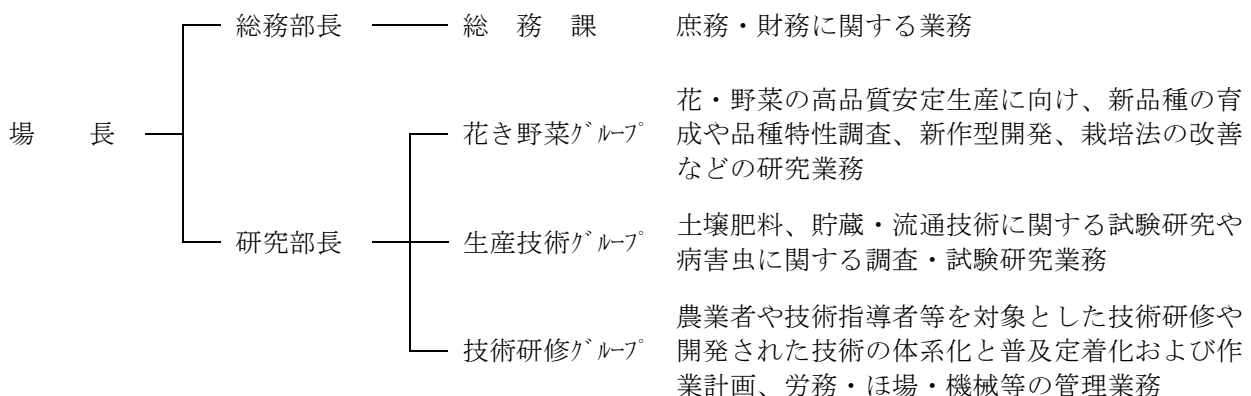
本センターは洪積台地（地形は低位段丘、平坦～緩傾斜）にあり、土壌の種類は細粒灰色台地土（暗色表層疑似グライ土）である。しかし、圃場整備により、作土層(40cm)は旧表土22cmに砂質軽石流堆積物を18cm客土、混和している。

ハウス圃場は酸性褐色森林土の客入土にバーク堆肥、土壌改良資材（炭カル）を投入し、改良した。平成9年、さらに砂質軽石流堆積物15cm程度を客土、混和した。

3. 用地および利用区分

総面積	51.8ha
建物敷地	19.2ha
庁舎	10.2ha
調査棟・温室	3.7ha
機械庫その他	5.3ha
畑	31.0ha
試験・展示・研修圃場	26.7ha
ハウス・枠圃場	4.3ha
道路用地	1.6ha

4. 機 構 （令和3年3月31日現在）



花・野菜技術センター技術普及室*

上席普及指導員 — 主任普及指導員

庶務・財務に関する業務

花・野菜の高品質安定生産に向け、新品種の育成や品種特性調査、新作型開発、栽培法の改善などの研究業務

土壌肥料、貯蔵・流通技術に関する試験研究や病害虫に関する調査・試験研究業務

農業者や技術指導者等を対象とした技術研修や開発された技術の体系化と普及定着化および作業計画、労務・ほ場・機械等の管理業務

普及センター等への支援、専門技術の調査研究

(* 所属：北海道農政生産振興局技術普課)

5. 職 員

(1) 職員数 (令和3年3月31日現在)

区 分	場 長	部 長	総務課	花き野菜G	生産技術G	技術研修G	計
研 究 (フ°ロハ°-)	1	1		7	6	2	16
研究支援 (フ°ロハ°-)			1			4	5
研究支援 (道派遣)		1	3			2	7
計	1	2	(兼務1外数) 4	7	6	8	28

(2) 現職員名簿 (令和3年3月31日現在)

所 属	職 名	氏 名	所 属	職 名	氏 名	
総務部 総務課	場 長	堀田 治邦	生産技術G	研究主査	野田 智昭	
	総務部長	杉山 善康	〃	主査(病虫)	佐々木 純	
	総務課長(兼)	杉山 善康	〃	研究主任	藤根 統	
	〃	主査(総務)	〃	専門研究員	柿崎 昌志	
	〃	主査(調整)	市川 雅一	技術研修G	研究主幹	古館 明洋
	〃	主 任	岩橋 広樹	〃	主査(技術研修)	大久保進一
	〃	技 師	高崎真梨奈	〃	主査(研修)	齊藤 優子
研究部 花き野菜G	研究部長	三好 智明	〃	専門主任	北村 憲吾	
	研究主幹	林 哲央	〃	主 任	静川 拓海	
	〃	主査(花き)	〃	〃	玉川 忠	
	〃	主査(野菜)	〃	〃	南 貴夫	
	〃	主査(施設)	〃	〃	北 和宏	
	〃	専門研究員	平井 泰			
	〃	研究職員	漆畑裕次郎	(道技術普及室)	上席普及指導員	川口 招宏
	〃	研究職員	柏谷 太亮	〃	主任普及指導員	鹿野 理
	生産技術G	研究主幹	小宮山誠一			
	〃	主査(栽培環境)	上野 達			

(3) 転入・採用

職 名	氏 名	採用転入年月日	備考
場 長	堀田 治邦	2.4.1	中央農試病虫部
研究部花き野菜G 研究主幹	林 哲央	2.4.1	農研本部企画調整部 原子力環境センター駐在
研究部花き野菜G 主査(施設)	地子 立	2.4.1	上川農試研究部地域技術G
研究部花き野菜G 専門研究員	平井 泰	2.4.1	中央農試遺伝資源部遺伝資源G
研究部生産技術G 研究主幹	小宮山誠一	2.4.1	中央農試加工利用部農産品質G
研究部技術研修G 研究主幹	古館 明洋	2.4.1	十勝農試研究部生産環境G
研究部技術研修G 主査(技術研修)	大久保進一	2.4.1	花野技セ研究部花き野菜G
研究部技術研修G 主査(研修)	齊藤 優子	2.4.1	北海道農政部畜産振興課
研究部技術研修G 専門主任	北村 憲吾	2.4.1	北海道空知総合振興局農務課
研究部技術研修G 主任	静川 拓海	2.4.1	畜試家畜研究部中小家畜G
北海道技術普及課(技術普及室)	川口 招宏	2.4.1	石狩農業改良普及センター

(4) 転出・退職

職 名	氏 名	転出退職年月日	備考
場長	桑名 真人	2. 3. 31	北海道農政部生産振興局
研究部花き野菜G 研究主幹	福川 英司	2. 3. 31	農研本部企画調整部地域技術G
研究部花き野菜G 研究主任	木村 文彦	2. 3. 31	農研本部企画調整部企画課
研究部花き野菜G 研究主任	江原 清	2. 3. 31	道南農試研究部生産技術G
研究部生産環境G 研究主幹	美濃 健一	2. 3. 31	農業研究本部企画調整部 原子力環境センター駐在
研究部生産環境G 研究主査	田丸 浩幸	2. 3. 31	上川農試研究部生産技術G
研究部技術研修G 研究主幹	鳥越 昌隆	2. 3. 31	酪農試天北支場地域技術G
研究部技術研修G 主査(技術研修)	植野玲一郎	2. 3. 31	中央農試遺伝資源部遺伝資源G
研究部技術研修G 主査(研修)	山井 雅之	2. 3. 31	再任用の任期満了による退職
研究部技術研修G 専門主任	高橋 英樹	2. 3. 31	北海道空知総合振興局農務課
研究部技術研修G 専門主任	寺口 佳孝	2. 3. 31	中央農試遺伝資源部遺伝資源G
研究部技術研修G 専門主任	北 和宏	2. 3. 31	定年退職、技術研修G 主任(再)
北海道技術普及課(技術普及室)	宮町 良治	2. 3. 31	日高農業改良普及センター

6. 収入支出決算額

(1) 収入決算額 (単位：円)

科 目	決 算 額
技術普及指導手数料	27,820
農産物売払収入	0
不用品売払収入	0
法人財産使用料等	340,026
その他雑収入	0
共同研究費負担金	1,500,000
国庫受託研究収入	0
道受託研究収入	2,169,246
その他受託研究収入	12,551,000
施設整備費補助金収入	0
計	16,586,092

※事業費支弁人件費振替額を含まない

(2) 支出決算額 (単位：円)

科 目	予算額	決算額	繰越額	残 額
戦略研究費	0	0	0	0
重点研究費	9,340,000	8,298,233	1,041,767	0
職員研究奨励費	0	0	0	0
経常研究費	7,089,000	6,707,126	0	381,874
研究開発推進費	0	0	0	0
技術普及指導費	5,502,820	5,502,820	0	0
研究用備品整備費(積立金)	0	0	0	0
維持管理経費(研究)	1,035,000	1,035,000	0	0
維持管理経費	73,941,000	72,199,695	0	1,741,305
運営経費	56,328,000	55,729,924	0	598,076
共同研究費	1,500,000	1,500,000	0	0
国庫受託研究費	0	0	0	0
道受託研究費	2,168,000	2,167,246	0	754
その他受託研究費	11,418,260	11,418,260	0	0
施設整備費補助金	0	0	0	0
施設整備費(繰越積立金)	0	0	0	0
計	168,322,080	164,558,304	1,041,767	2,722,009

※事業費支弁人件費振替額を除く

7. 建 物

(1) 現有 (令和3年3月31日現在)

名 称	構 造	面積(m ²)	名 称	構 造	面積(m ²)
事務庁舎	レンガ造2階	449.86	研究庁舎	鉄筋コンクリート2階	2,104.73
総合研究庁舎	鉄筋コンクリート2階	721.36	展示温室	鉄骨平屋	118.87
農機具格納庫	木造平屋	233.00	研修宿泊棟	鉄筋コンクリート2階	1,205.84
総務課第2車庫	〃	43.74	参観者トイレ	鉄骨平屋	37.96
庁舎2号物置	〃	49.58	花き・野菜調査棟	鉄骨平屋	384.00
第2運動器具庫	〃	24.79	病虫・土壌作物調査棟	〃	390.00
運動具庫	〃	5.04	保鮮実験棟	〃	232.80
管理科油類格納庫	ブロック造平屋	5.69	花き・野菜詰所	〃	141.62
管理科職員詰所	木造平屋	106.92	床土置場・土詰播種作業棟	〃	553.80
機材庫	鉄骨平屋	1,033.46	農機具格納庫・車庫棟	〃	659.34
農業機械格納庫	〃	569.16	電気室棟	〃	66.30
総合車庫	〃	187.20	花き温室-1	〃	166.00
来園者トイレ	鉄筋コンクリート平屋	29.25	〃 -2	〃	166.00
総務課倉庫	木造平屋	43.74	〃 -3	〃	166.00
圃場避難棟-1	〃	29.16	野菜温室-1	〃	166.00
〃 -2	〃	29.16	〃 -2	〃	166.00
総務課物置3	木造平屋	26.46	〃 -3	〃	166.00
〃 4	〃	26.46	病虫温室	〃	166.00
〃 5	〃	14.87	土肥温室	〃	166.00
第2研修寮	ブロック造平屋	122.50	研修温室-1	〃	290.25
第2研修寮物置	木造平屋	9.93	〃 -2	〃	290.25
第2堆肥舎	鉄筋コンクリート平屋	128.00	環境制御温室-1	〃	166.00
			〃 -2	〃	166.00
			人工気象室	〃	80.18
			ミスト室	〃	164.20

8. 施設および備品

(1) 新たに設置した施設

名 称	構造	数量	新設年月日	価 格	摘 要
な し					

(2) 新たに購入した備品 (50万円以上)

品 名	数量	規格および型式	金 額	配 置
バキュームカー	1	IHIアグリテック YSTAR TVC2530	1,980,000	技術研修G
乗用草刈機	1	(株)丸山製作所 MGA228-2	825,000	技術研修G

Ⅱ 作 況

1. 気象概要

(1) 冬期間の経過

冬期間（11月～3月）の平均気温は11月上旬から1月上旬にかけてやや低めに推移した。2月中旬～3月下旬に高かった。降水量は11月と1月～2月にやや少なく、3月にやや多かった。日照時間は11月～12月にやや少なく、3月中～下旬に多かったが、その他は平年並であった。

(2) 農耕期間の経過

農耕期間（5月から9月）の平均気温は9月上旬にやや高かったが、その他は平年並であった。農耕期間の積算気温は2809℃で平年の103%とやや高めであった。

降水量は7月と9月に少なく、農耕期間を通しての積算降水量は417mmで平年の72%であり、干ばつ傾向にあった。

日照時間は6月中旬～下旬に少なく、5月中旬と7月中旬に多かった。農耕期間を通しての積算日照時間は822時間で平年の97%であった。

本年の農耕期間の気象は、気温と日照時間は概ね平年並で、降水量は少なかった。

(3) 月別の経過

4月：平均気温は上旬と下旬に高かった。降水量は中旬に少なかった。日照時間は中旬に特に多く、下旬に少なかった。

5月：平均気温は上旬にやや高かったが概ね平年並であった。降水量は中旬に少なかった。日照時間は中旬に多く、月を通じてやや多めであった。

6月：平均気温は下旬にやや低かったが概ね平年並で、降水量は上旬に少なかった。日照時間は下旬に少なかった。

7月：平均気温は平年並であった。降水量は月を通じて少なく、月合計で113mm少なかった。一方で日照時間は上～中旬に多かった。

8月：平均気温は平年並であった。降水量は中旬に少なかった。日照時間は上旬にやや少なかった。

9月：平均気温は上旬に高かった。降水量は月を通じて少なく、月合計で69mmと少なかった。日照時間は中旬に少なかった。

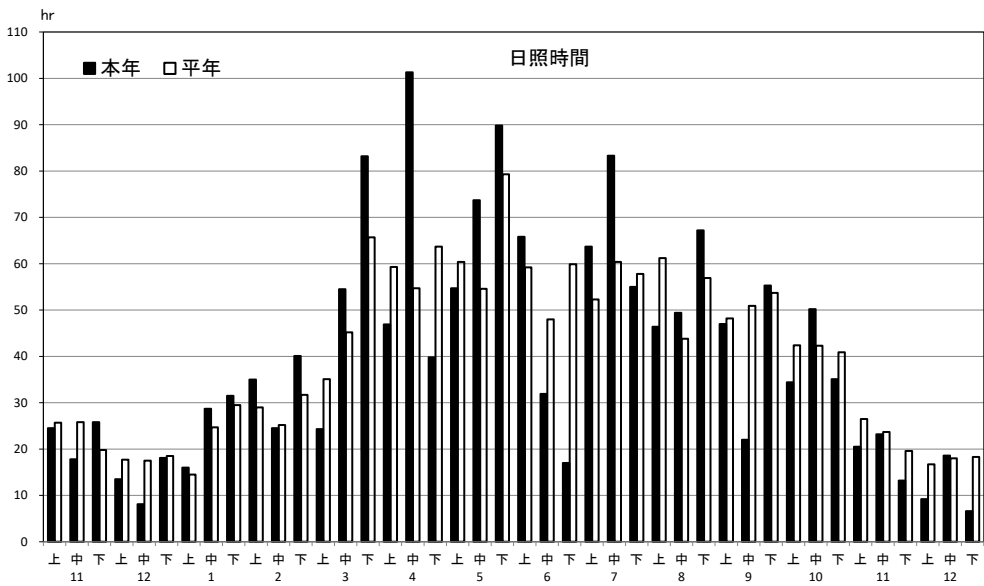
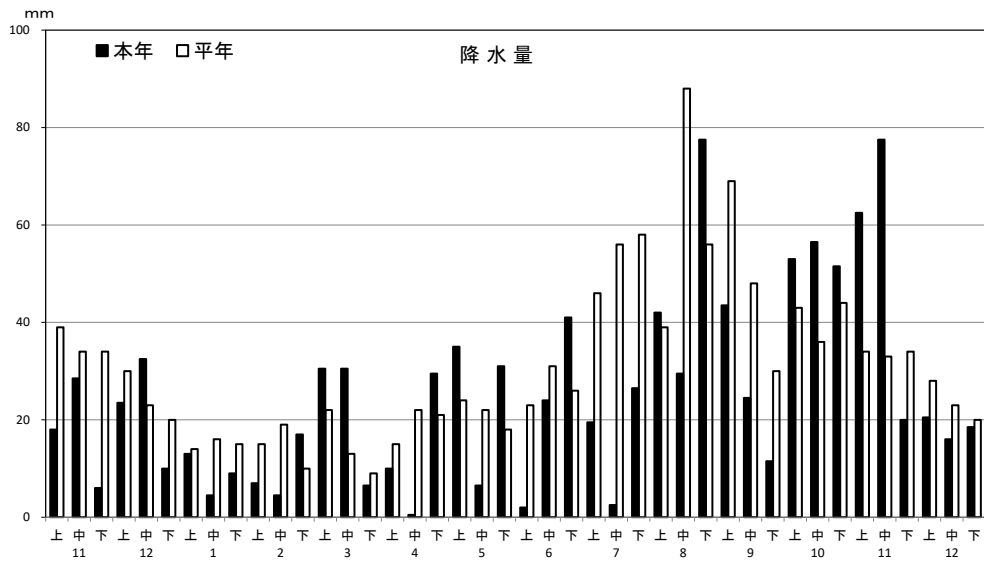
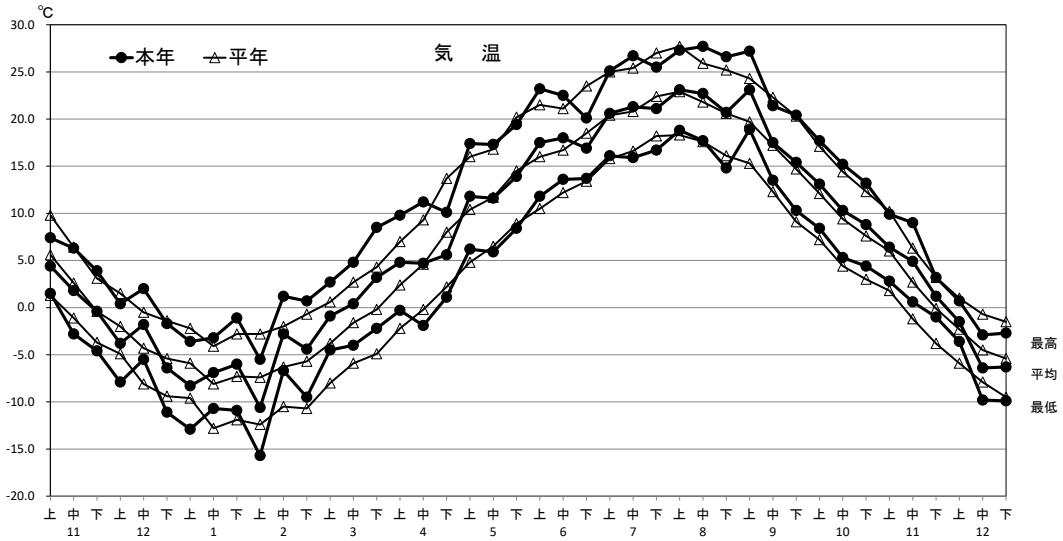
10月：平均気温はやや高めに推移し、降水量はやや多めに推移した。日照時間は上旬に少なく、中旬に多かった。

2. 野菜類の生育状況

(1) いちご（対象品種：「けんたろう」）

令和元年8月23日定植の無加温半促成作型で土耕栽培した。定植後の平均気温は、8月下旬と9月中旬にやや低く、10月上旬にやや高く、10月下旬に高かった。ハウス天井フィルムを被覆した2月27日の積雪深は平年より約4割少なく、「けんたろう」の開花始期は4月14日で平年より4日早かった。3月下旬の平均気温が平年より3.4℃高く、4月上旬の平均気温が平年より2.4℃高かった。4月中旬の日照時間が平年より46.6時間多く、5月中旬の日照時間が平年より19.1時間多かった。このため、収穫始期は5月16日となり、平年より6日早かった。

6月上旬～中旬の平均気温が平年より1.5～1.3℃とやや高かったものの、5月中旬～下旬の平均気温は平年並で、規格内一果重は13.4gで平年並であった。規格内収穫果数は161千個/10aで平年より多かった。総収量は2,623kg/10aでやや多収、規格内収量も2,167kg/10aで平年よりやや多かった。Brix(屈折計示度)は9.6%で平年並みであった。



滝川気象図 (令和元年11月～令和2年12月)

気象表 (令和元年11月～令和2年12月)

年	月	旬	平均気温 (°C)			最高気温 (°C)			最低気温 (°C)			降水量 (mm)			降水日数 (日)			日照時間 (時間)		
			本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較
R1	11	上	4.4	5.6	△ 1.2	7.4	9.8	△ 2.4	1.5	1.3	0.2	18	39	△ 21	6	6	0	24.5	25.7	△ 1.2
		中	1.8	2.6	△ 0.8	6.3	6.4	△ 0.1	-2.8	-1.1	△ 1.7	29	34	△ 6	8	6	2	17.8	25.8	△ 8.0
		下	-0.4	-0.4	0.0	3.9	3.1	0.8	-4.6	-3.7	△ 0.9	6	34	△ 28	3	6	△ 3	25.8	19.8	6.0
	12	上	-3.8	-2.0	△ 1.8	0.4	1.5	△ 1.1	-7.9	-4.9	△ 3.0	24	30	△ 7	9	6	3	13.5	17.7	△ 4.2
		中	-1.8	-4.3	2.5	2.0	-0.5	2.5	-5.5	-8.1	2.6	33	23	10	8	6	2	8.1	17.5	△ 9.4
		下	-6.4	-5.4	△ 1.0	-1.7	-1.4	△ 0.3	-11.1	-9.4	△ 1.7	10	20	△ 10	6	6	0	18.1	18.5	△ 0.4
	1	上	-8.3	-5.9	△ 2.4	-3.6	-2.2	△ 1.4	-12.9	-9.6	△ 3.3	13	14	△ 1	5	5	0	16.0	14.5	1.5
		中	-6.9	-8.1	1.2	-3.2	-4.1	0.9	-10.7	-12.8	2.1	5	16	△ 12	2	5	△ 3	28.7	24.7	4.0
		下	-6.0	-7.3	1.3	-1.1	-2.8	1.7	-10.9	-11.9	1.0	9	15	△ 6	5	6	△ 1	31.5	29.5	2.0
	2	上	-10.6	-7.4	△ 3.2	-5.5	-2.8	△ 2.7	-15.7	-12.4	△ 3.3	7	15	△ 8	4	5	△ 1	35.0	29.0	6.0
		中	-2.8	-6.3	3.5	1.2	-2.0	3.2	-6.7	-10.5	3.8	5	19	△ 15	4	6	△ 2	24.5	25.2	△ 0.7
		下	-4.4	-5.7	1.3	0.7	-0.7	1.4	-9.5	-10.7	1.2	17	10	7	5	4	1	40.1	31.7	8.4
3	上	-0.9	-3.8	2.9	2.7	0.6	2.1	-4.5	-8.0	3.5	31	22	9	4	5	△ 1	24.3	35.1	△ 10.8	
	中	0.4	-1.6	2.0	4.8	2.7	2.1	-4.0	-5.9	1.9	31	13	18	3	3	0	54.5	45.2	9.3	
	下	3.2	-0.2	3.4	8.5	4.3	4.2	-2.2	-4.9	2.7	7	9	△ 3	6	3	3	83.2	65.7	17.5	
4	上	4.8	2.4	2.4	9.8	7.0	2.8	-0.3	-2.2	1.9	10	15	△ 5	4	4	0	46.9	59.3	△ 12.4	
	中	4.7	4.6	0.1	11.2	9.3	1.9	-1.9	-0.2	△ 1.7	1	22	△ 22	1	4	△ 3	101.3	54.7	46.6	
	下	5.6	8.0	△ 2.4	10.1	13.7	△ 3.6	1.1	2.2	△ 1.1	30	21	9	7	4	3	39.8	63.7	△ 23.9	
5	上	11.8	10.4	1.4	17.4	16.0	1.4	6.2	4.8	1.4	35	24	11	4	4	0	54.7	60.4	△ 5.7	
	中	11.6	11.7	△ 0.1	17.3	16.8	0.5	5.9	6.5	△ 0.6	7	22	△ 16	3	3	0	73.7	54.6	19.1	
	下	13.9	14.5	△ 0.6	19.4	20.2	△ 0.8	8.4	8.9	△ 0.5	31	18	13	5	3	2	89.8	79.3	10.5	
6	上	17.5	16.0	1.5	23.2	21.5	1.7	11.8	10.5	1.3	2	23	△ 21	2	4	△ 2	65.8	59.2	6.6	
	中	18.0	16.7	1.3	22.5	21.1	1.4	13.6	12.2	1.4	24	31	△ 7	4	4	0	31.9	48.0	△ 16.1	
	下	16.9	18.5	△ 1.6	20.1	23.5	△ 3.4	13.7	13.4	0.3	41	26	15	6	2	4	17.0	59.9	△ 42.9	
7	上	20.6	20.4	0.2	25.1	25.0	0.1	16.1	15.8	0.3	20	46	△ 27	3	4	△ 1	63.7	52.3	11.4	
	中	21.3	20.8	0.5	26.7	25.4	1.3	15.9	16.6	△ 0.7	3	56	△ 54	1	3	△ 2	83.3	60.4	22.9	
	下	21.1	22.4	△ 1.3	25.5	27.0	△ 1.5	16.7	18.2	△ 1.5	27	58	△ 32	3	3	0	55.0	57.8	△ 2.8	
8	上	23.1	22.9	0.2	27.3	27.7	△ 0.4	18.8	18.3	0.5	42	39	3	6	3	3	46.4	61.2	△ 14.8	
	中	22.7	21.8	0.9	27.7	25.9	1.8	17.7	17.6	0.1	30	88	△ 59	6	5	1	49.4	43.8	5.6	
	下	20.7	20.6	0.1	26.6	25.2	1.4	14.8	16.1	△ 1.3	78	56	22	3	5	△ 2	67.2	56.9	10.3	
9	上	23.1	19.7	3.4	27.2	24.3	2.9	18.9	15.3	3.6	44	69	△ 26	4	4	0	47.0	48.2	△ 1.2	
	中	17.5	17.2	0.3	21.4	22.3	△ 0.9	13.5	12.3	1.2	25	48	△ 24	4	5	△ 1	22.0	50.9	△ 28.9	
	下	15.4	14.7	0.7	20.4	20.3	0.1	10.3	9.1	1.2	12	30	△ 19	3	4	△ 1	55.3	53.7	1.6	
10	上	13.1	12.1	1.0	17.7	17.1	0.6	8.4	7.2	1.2	53	43	10	6	5	1	34.4	42.4	△ 8.0	
	中	10.3	9.4	0.9	15.2	14.4	0.8	5.3	4.4	0.9	57	36	21	8	6	2	50.2	42.3	7.9	
	下	8.8	7.6	1.2	13.2	12.3	0.9	4.4	3.0	1.4	52	44	8	6	5	1	35.1	40.9	△ 5.8	
11	上	6.4	6.0	0.4	9.9	10.2	△ 0.3	2.8	1.8	1.0	63	34	29	10	5	5	20.5	26.5	△ 6.0	
	中	4.9	2.7	2.2	9.0	6.3	2.7	0.6	-1.2	1.8	78	33	45	7	6	1	23.2	23.7	△ 0.5	
	下	1.2	-0.1	1.3	3.2	3.2	0.0	-1.0	-3.8	2.8	20	34	△ 14	9	6	3	13.2	19.6	△ 6.4	
12	上	-1.5	-2.3	0.8	0.7	1.0	△ 0.3	-3.6	-5.9	2.3	21	28	△ 8	8	6	2	9.2	16.7	△ 7.5	
	中	-6.4	-4.5	△ 1.9	-2.9	-0.7	△ 2.2	-9.8	-7.9	△ 1.9	16	23	△ 7	8	6	2	18.6	18.0	0.6	
	下	-6.3	-5.4	△ 0.9	-2.7	-1.5	△ 1.2	-9.9	-9.5	△ 0.4	19	20	△ 2	7	6	1	6.6	18.3	△ 11.7	
5～9月積算			2809.3	2738.8	70.5	3549.6	3491.9	57.7	2062.0	2003.8	58.2	417	575	△ 159	57	56	1	822.2	846.6	△ 24.4
平年比(%)			102.6			101.7			102.9			72.4			101.8			97.1		

注1 滝川地域気象観測所のAMeDAS観測値。 注2 日照時間は太陽電池式(新型)による。 注3 平年値は前10カ年の平均値。 注4 △印は減を示す。

Ⅲ 事業の推進方向と成果の概要

1. 研究部

(1) 花き野菜グループに関する試験

花きでは、切り花の出荷調整および品質向上に関する試験を実施する。野菜では、いちごの新品種育成、野菜の品種特性調査、栽培法改善および鮮度保持試験を実施する。花きと野菜に共通して施設栽培の環境制御にかかる試験を実施する。花きおよび野菜ともに、技術研修Gの研修事業を支援する。

①「いちご春どり栽培の収益向上に寄与する多収性新品種の育成」では、春どり栽培用に「ゆきララ」並の果実品質を有する多収性いちご品種を育成することを目標に、育成系統の選抜を行った。生産力検定では「空知 38 号」を中止し、「空知 39 号」を令和 3 年定植から継続検定することにした。生産力予備検定では「28 交 2-313」、「28 交 14-55」、「28 交 2-340」を供試し、「27 交 13-280」、「27 交 12-123」、「28 交 3-39」、「28 交 11-39」を中止することにした。系統選抜では「29 交 2-63」、「29 交 2-73」、「29 交 2-172」、「29 交 7-47」を供試することにした。系統予備選抜では「29 交 2-21」を再検討することにした。

②「野菜の地域適応性検定」では、道南農試（北斗市）、豊浦町、比布町におけるいちご検定系統「空知 38 号」および「空知 39 号」の生育・収量などを検定した。標準品種に対して「空知 38 号」は収量が多く品質も同程度だったが、疫病の罹病が見られたことから中止することにした。「空知 39 号」は標準品種と同等と判断され、令和 3 年に定植して継続検討することにした。

③「いちご新品種‘ゆきララ’の安定生産に向けた栽培法の確立」では生産現場での課題（果房数の確保や収穫初期の規格内収量の確保）を解決する栽培技術を明らかにした。

④「加工用トマトの品種特性評価」では供試 4 品種の生育および収量性、内部品質を標準品種‘なつのしゅん’と比較し、特性を明らかにした。

⑤「養液栽培システム‘ういず One’を用いた夏秋トマトの高品質栽培技術の確立」では、裂果、収量および食味からみた適品種と仕立て法に対応した給液管理を検討した。

⑥「北海道におけるアスパラガス柵板式高畝栽培システムの適性評価」では香川県のハウス栽培で開発された「柵板式高畝栽培システム」の北海道での有効性を明らかにするとともに、本栽培システムに適した多収品種を選定するために、ハウス内に柵板による高畝を造成した。

⑦「北海道加工にんじんの安定供給を目指した栽培・出荷体系の確立」では 9～10 月に偏る現行の道産にんじんの収穫・出荷ピークを平準化させ、にんじん加工実需に原料を安定供給するために、加工歩留まりの向上と供給期間の延長を検討した。加工にんじん品種「カーソン」と「紅ぞろい」の播種・収穫時期ならびに貯蔵方法を組み合わせ合わせて検討した。

⑧「加工・業務用たまねぎ中生系統の特性評価」では各系統に抽台株発生が認められ、「北もみじ 2000」と比較して、倒伏期は同程度～やや遅く、収量性は同程度～低く、長球傾向を示し、内部成分は高かった。次年度の試験用種子が確保できないため、本年度で試験を中止することにした。

⑨「鮮度保持触媒資材を用いた青果物の鮮度保持技術の実証」では、いちごについては供試資材による果実の鮮度保持・かび抑制の効果は 15℃条件では認められず、メロンについては 3℃条件で 2 か月貯蔵した果実の内部品質維持、果実表面のかびを抑制する傾向が認められた。

⑩「たまねぎ有機栽培における育苗技術の開発」では現地（新篠津村）圃場において実規模で稼働した移植機での試作培土の適用性を検討した。

⑪「赤色 LED 照明を利用した花きの省力・品質向上技術」ではトルコギキョウとアスターにおいて花芽形成の抑制効果と、その切り花品質（節数、切り花長）への影響を検討した。

⑫「スターチス・シヌアータに対する Dr. アミノアップの施用効果」では定植前ポット苗浸漬と生育初期の葉面散布が生育と根量に与える効果は小さく、1 番花 2 番花とも切り花本数や品質に有意な差が認められないことを確認した。

⑬「パイプハウスにおける環境および養分制御による省力多収技術の開発」では無加温ハウスにお

ける温度制御区において総収量、良果収量を検討し、湿度制御による裂果程度を検討した。

⑭「農業資材試験」では、たまねぎに対する除草剤2点について成績を取りまとめ、かぼちゃに対する除草剤1点について継続検討した。

⑮「空知農業技術支援会議」におけるプロジェクト課題（シネンシス系スターチスの春植え作型の生産安定）では苗の高温管理と未抽台株発生との関係を検討した。

(2) 生産技術グループに関する試験

生産技術グループは、花き・野菜の肥培管理や貯蔵・流通等の栽培環境に関する試験および病害虫に関する試験を実施している。また、技術研修グループで実施する地域支援課題や技術研修を分担する。

1) 栽培環境に関する試験

①「たまねぎ有機栽培における育苗技術の開発」では、有機栽培で使用できる培土の組成及び充填方法の検討を行った。粘土とピートモスの比率は4:6、ベントナイト添加割合は10~15%が妥当と判断された。

②「加工・業務用途に対応したたまねぎ貯蔵性の解析とエチレン処理による長期貯蔵技術の開発」では、品種（4品種）、栽培法（直播、移植）、規格、施肥法（全量基肥、基肥＋分施）について、エチレンによる貯蔵期間の延長効果に及ぼす影響を検討した。また、加工利用の可否に係る内部萌芽長の判断基準を加工業者の聞き取りから設定した。令和2年度北海道農業試験会議に提案し、指導参考事項となった。

③「養液栽培システム「ういずOne」を用いた夏秋トマトの高品質栽培技術の確立」では、大玉トマトに対する2本仕立て給液法を検討した。

④「ういずOneにおけるヤシがら培地の利用効果」では、トマトのういずOne栽培システムの培地を軽量で省力的に設置できるヤシがらに置き換えた際の収量、品質、労力について検討した

⑤「にんにくに対する生分解性マルチおよび肥効調節型肥料を用いた省力栽培技術」では、北海道のにんにく栽培において生分解性マルチおよび肥効調節型肥料を用いた省力栽培法を開発することを目的に、今年度は生分解性マルチの設置および肥効調節型肥料を施肥し、種球を播種した。越年

後に生育、収量、品質、窒素供給特性等を調査する。

⑥「青果および加工利用における北海道産さつまいもの品質向上技術の開発」では、被覆資材による地温上昇効果および収量への影響、品種と収穫時期による収量および乾物率への影響、品種に対応した貯蔵条件をそれぞれ調査した。

⑦「さつまいもにおけるDr.アミノアップの施用効果」では、Dr.アミノアップ資材の苗浸漬および葉面散布がさつまいもの収量、品質等に及ぼす影響を調査した。

⑧「農業資材試験」ではさつまいもに対して肥料1点の効果を調査した。

⑨「生理障害診断試験」では1件の診断依頼に対応した。

⑩「農業農村整備事業に係る土壌調査」では、3地区3箇所土壌調査を実施し、各土壌の特徴と改良対策を示した。

2) 病害虫に関する試験

①「新規ウイルス検査法を導入した道産にんにくのウイルスフリー種苗管理技術」では、道内のにんにく生産地におけるウイルス病と媒介虫の発生実態調査を実施した。また、実態調査で得られたウイルスの遺伝子情報を元に、マクロアレイ法の試作キットを作製した。さらに、防虫ネットを用いた隔離による再感染防止効果を調査した。

②「いちご春どり栽培の収益向上に寄与する多収性品種の育成」では、検定系統「空知38号」と「空知39号」について、疫病と萎黄病の特性検定ならびに萎凋病の抵抗性試験を実施した。

③「農作物病害虫診断試験」では、41件の診断依頼に対応した。

④「農業資材試験」では、殺菌剤14点、殺虫剤11点についてその効果を調査した。また、複数事例で有効性が認められた10点の殺菌剤および殺虫剤が指導参考事項となった。

⑤「病害虫発生予察調査」では、ねぎのべと病とさび病について、時期ごとの発生量などを調査した。

(3) 技術研修グループに関する試験

技術研修グループは、地域農業技術支援会議に集められたニーズなど、現地実証が必要な課題に

ついて支援を行うとともに、これまでの成果を普及するために現地実証試験等を行っている。

1) 革新的技術導入による地域支援

①「ミニトマトの摘房および側枝葉利用による秋季安定生産技術の実証」では、「ミニトマトの摘房および側枝葉利用」の現地栽培試験を月形町で実施した。摘房処理に側枝葉利用処理を組み合わせることで、9月以降の収量性（良果収量、果実肥大）が向上することが実証された。

2. 技術普及室

(1) 推進方向

技術普及室は、地域の試験研究に対する要望を的確に把握し、実用的な技術開発を行うとともに、その迅速な普及・定着を普及組織と一体的に推進するために、地域農業の支援（地域農業技術支援会議）、農業改良普及センターへの技術支援を柱として、花き・野菜研修事業および農業大学校、普及指導員の研修事業の支援も含めて研究部門、農業改良普及センター、振興局および関係する機関団体と連携を図り活動を展開した。

(2) 成果の概要

1) 地域農業技術支援会議への支援

空知総合振興局の地域農業技術支援会議構成員として参画し、農業研究本部技術普及室・普及センター・振興局と連携し専門場の研究および普及の立場から、花きと野菜に関する課題整理や解決方策を積極的に支援した。三者会議・関係者会議の他、普及センターが主体となったモデル地区の課題解決プロジェクトに参画した。

2) 農業改良普及センター支援と普及指導員研修

普及センターからの支援要請について、専門項目に関する支援要請活動計画に基づき支援した。

また、普及センターが取り組む普及活動に関する要請（重点普及課題、普及課題等）についても、管轄農試技術普及室と連携し積極的に技術支援を行った。

さらに、気象災害や突発的な病害虫の発生に対して、技術普及課および各技術普及室と連携を取りながら迅速に対応した。

普及指導員研修については、花・野菜技術センターで実施している道段階研修の新任者早期養成研修、専門技術研修（花き・野菜）、高度専門技術研修（花き、野菜）について技術普及室のほか花き野菜グループ、生産技術グループ、技術研修グループからの講義・実習等の協力も得て実施し、振興局段階や職場段階での研修についても積極的に支援した。

3) 研修事業への支援

花き・野菜技術研修事業における、講義・実習および運営等に関する支援を実施した。

その他の研修として、農業大学校等との協力連携による農大稲作経営コース集中講義の支援を行った。

4) その他

営農技術対策の提供や各種事業への助言など、農業者組織や関係機関・各種団体からの要請への支援等を行った。

IV 試験研究および地域支援等活動の課題名

1. 花き野菜に関する試験

(1) 春どり栽培向け多収性いちご新品種の育成

試験期間：平成30～令和2年

担当 G：花き野菜G、生産技術G

目的：春どり栽培用に「ゆきララ」並の果実品質を有する多収性いちご品種を育成する（目標収量：「ゆきララ」対比120%）。

(2) 野菜地域適応性検定（いちご）

試験期間：平成30～令和2年

担当 G：花き野菜G、上川農試、道南農試

目的：育成系統の各地域における適応性を検討し、新品種育成のための資料を得る。

(3) いちご新品種「ゆきララ」の安定生産に向けた栽培法の確立

試験期間：平成30～令和2年

担当 G：花き野菜G、上川農試、道南農試

目的：いちごの新品種「ゆきララ」の安定生産に向けて、果房数の確保や収穫初期の規格内収量を増加させる栽培法を確立する。

(4) 加工用トマトの品種特性調査

試験期間：平成30～令和2年

担当 G：花き野菜G

目的：加工用トマト品種について北海道での農業特性を評価し、安定生産に資する。

(5) 養液栽培システム「ういず One」を用いた夏秋トマトの高品質栽培技術の確立

試験期間：平成31(令和元)～令和3年

担当 G：花き野菜G

目的：低コストで高品質な果実生産の可能な養液栽培技術を開発し、トマトの生育、収量、品質への影響を明らかにする。

(6) 北海道におけるアスパラガス柵板式高畝栽培システムの適性評価

試験期間：令和2～6年

担当 G：花き野菜G、上川農試

目的：香川県で開発された柵板式高畝方式の北海道での有効性を明らかにするとともに、本栽培方式に適した多収品種を選定する。

(7) 北海道加工にんじんの安定供給を目指した栽培・出荷体系の確立

試験期間：令和2～5年

担当 G：花き野菜G、十勝農試

目的：加工向け品種の播種・収穫時期、貯蔵方法を組み合わせて供給期間の延長をはかり、収穫・出荷ピークを平準化させる。

(8) 加工・業務用たまねぎ中生系統の特性評価

試験期間：令和2～4年

担当 G：花き野菜G、北見農試、十勝農試

目的：北見農試と(株)日本農林社が共同研究で育成したたまねぎ中生系統の熟期、収量性、耐抽台性、直播栽培適性等を評価する。

(9) 鮮度保持触媒資材を用いた青果物の鮮度保持技術の実証

試験期間：令和2年

担当 G：花き野菜G

目的：新規触媒からなる鮮度保持資材のいちごとメロンでの鮮度保持効果を確認する。

(10) たまねぎ有機培土における育苗技術の開発

試験期間：平成31(令和元)～令和4年度

担当 G：生産技術G、花き野菜G

目的：化学合成資材を使わずに機械移植可能な育苗培養土を開発し、作成された培養土に対応した育苗管理法を明らかにする。

(11) 赤色LED照明を利用した花きの省力・品質向上技術

試験期間：令和2～4年

担当 G：花き野菜G

目的：トルコギキョウとアスターにおいて花芽形成の抑制効果を有する赤色LED照明を利用した省力・品質向上技術を開発する。

(12) スターチス・シヌアータに対する Dr. アミノアップの施用効果

試験期間：令和2年

担当 G：花き野菜G

目的：資材施用による初期生育の促進と茎葉散布時の株元浸透による草勢改善を図り、切り花品質と採花数への効果を確認する。

(13) パイプハウスにおける環境および養分制御による省力多収技術の開発

試験期間：令和2～4年

担当 G：花き野菜G、道南農試、上川農試、北総研

目的：パイプハウスにおける生産性向上のため、ハウス内環境と作物栄養状態のモニタリングによる環境総合制御技術を開発する。

(14) 農業資材試験

試験期間：昭和40年～

担当 G：花き野菜G（各農試と分担）

目的：野菜に対する除草剤、生育調節剤の実用性を検討する。

2. 栽培環境に関する試験

(1) たまねぎ有機栽培における育苗技術の開発

試験期間：令和元年～4年

担当 G：生産技術G

目的：有機栽培で利用できる培土の組成及び充填方法を検討し、有機栽培における培土固化技術を開発する。

(2) 養液栽培システム「ういず One」を用いた夏秋トマトの高品質栽培技術の確立

試験期間：令和元年～3年

担当 G：花き野菜G、生産技術G

目的：低コストで高品質な果実生産の可能な養液栽培技術を開発し、トマトの生育、収量、品質への影響を明らかにする。

(3) ういず One におけるヤシがら培地の利用効果

試験期間：令和2年～3年

担当 G：生産技術G

目的：ういず One を用いたトマト栽培において、ヤシがら培地を用いた省力化栽培の可能性を調査する。

(4) にんにくに対する生分解性マルチおよび肥効調節型肥料を用いた省力栽培技術

試験期間：令和2年～3年

担当 G：生産技術G

目的：北海道のにんにく栽培において生分解性マルチおよび肥効調節型肥料を用いた省力栽培法を開発する。

(5) 加工・業務用途に対応したたまねぎ貯蔵性の解析とエチレン処理による長期貯蔵技術の開発

試験期間：平成29～令和元年

担当 G：生産技術G

目的：加工・業務用途のたまねぎの安定供給に向けて、移植栽培と直播栽培の貯蔵性の差異を明らかにするとともに、エチレン処理による長期貯蔵技術を開発する。令和2年度は貯蔵後の品質調査を実施。

(6) 青果および加工利用における北海道産さつまいもの品質向上技術の開発

試験期間：令和元～3年

担当 G：生産技術G、ホクレン農総研

目的：栽培方法や貯蔵方法の違いがさつまいもの品質に及ぼす影響を解析し、品質目標の作成、加工用途判別の資とする。さらに貯蔵期間中の変化を解析し適切な貯蔵方法を明らかにする。

(7) さつまいもにおける Dr. アミノアップの施用効果

試験期間：令和2年

担当 G：生産技術G

目的：Dr. アミノアップの施用がさつまいもの収量および品質におよぼす影響を検討する。

(8) さつまいもにおける F・T・E の施用効果

試験期間：平成31年～令和3年

担当 G：生産技術G

目的：FTE の施用がさつまいもの収量および品質におよぼす影響を検討する。

(9) 農作物病害虫生理障害診断・緊急対策試験

②生理障害の診断

試験期間：令和2～6年

担当 G：生産技術G（各農試と分担）

目的：農業改良普及センター、農政部普及指導員等を通じて現場に診断依頼される農作物の栄養・生理障害を診断し、被害軽減のための適切な対策を示す。

(10) 農業農村整備事業等に係る土壌調査

試験期間：昭和40年～

担当 G：生産技術G（各農試と分担）

目的：北海道が実施する土地改良事業計画に基づき、該当地域の土壌調査を実施する。

3. 病害虫に関する試験

(1) 新規ウイルス検査法を導入した道産にんにくのウイルスフリー種苗管理技術

試験期間：令和元年～3年

担当 G：生産技術G（上川農試、北大、ホクサン（株）と共同）

目的：ウイルスフリー種苗の増殖体制の構築に不可欠なウイルス検査法と再汚染回避技術を確立する。

(2) いちご春どり栽培の収益向上に寄与する多収性品種の育成

試験期間：平成30～令和2年

担当 G：花き野菜G、生産技術G

目的：春どり栽培用に「ゆきララ」並の果実品質を有する多収性いちごの育種に係る、選抜系統の疫病・萎黄病の特性検定（病害抵抗性）と萎凋病抵抗性検定を実施する。

(3) 農作物病害虫生理障害診断・緊急対策試験

① 病害虫の診断

試験期間：令和2～6年

担当 G：生産技術G（各農試と分担）

目的：突発的に発生する病害虫による被害を防止するため、それらの診断を行うと共に、道内で新たに発生した病害虫の情報を記録し、蓄積する。

(4) 農業資材試験 殺菌・殺虫剤

試験期間：昭和45年～

担当 G：生産技術G（各農試と分担）

目的：新しい殺菌剤および殺虫剤の花き・野菜の病害虫に対する防除効果と薬害の有無ならびにその実用性を検討する。

(5) 病害虫発生予察調査

試験期間：昭和16年～

担当 G：生産技術G（各農試と分担）

目的：各地の病害虫発生状況と気象等を踏まえて病害虫の発生を予察し、効率的な防除に資する。当場ではねぎの病害および各種害虫の誘殺状況を調査する。

4. 地域支援に関する試験等

(1) トマト軟果玉の発生原因の解明と対策

試験期間：平成30～令和2年

担当 G：技術研修G

目的：トマト軟化玉発生のステージ、発生環境、土壌水分条件等の明確にし、発生要因別対策の提示する。

(2) 加工用トマトにおける適正な施肥量の検討

試験期間：平成30～令和2年

担当 G：生産技術G

目的：定植後からの各養分（窒素、リン酸、加里、苦土、石灰）吸収量を把握し、緩効性肥料の溶出速度把握するとともに適正施肥量・施肥体系を提示する。

(3) シネンシス系スターチスの春植え作型の生産安定

試験期間：令和元年～令和3年

担当 G：技術研修G、花き野菜G、生産技術G

目的：未抽台株の発生要因、生育不良の要因を調査し、課題解決策を提示する。

V 研修事業の概要

1. 概要

本道における花き・野菜の生産振興を支援するため、新技術（品種）の迅速な普及定着や生産を担う人材の育成等を目的とした技術研修を実施した。

2. 研修事業の推進

北海道花き・野菜技術研修に対する理解を深めるため、農政部関係課・農業高校・農業改良普及センター、市町村等への訪問、農業関係団体主催会議にて事業説明を実施した他、場内に専門委員会（研修事業運営委員会）を設置し、計画の策定、事業の円滑な実施・運営等について検討・調整を行った。

(1) 研修事業説明の経過

（市町村名）は訪問、その他は現場で実施した。

- 1) 8月28日 北海道立農業大学校（本別町）
- 2) 10月15～16日 北海道立農業大学校農業経営研究科学生への研修事業等の紹介
- 3) 10月16日 美唄尚栄高校の青年新規就農者確保対策事業
- 4) 10月23日 北海道農業公社（札幌市）
- 5) 10月26日 胆振総合振興局農務課（室蘭市）
- 6) 10月26日 胆振農改本所（伊達市）
- 7) 10月26日 壮瞥町役場（壮瞥町）
- 8) 10月27日 倶知安農業高校（倶知安町）
- 9) 10月27日 倶知安町役場（倶知安町）
- 10) 10月27日 後志農改本所（倶知安町）
- 11) 10月27日 ようてい農協（倶知安町）
- 12) 10月27日 後志農業共済組合（倶知安町）
- 13) 10月26日 岩見沢農業高校（岩見沢市）
- 14) 10月27日 新十津川農業高校（新十津川町）
- 15) 10月29日 深川東高校（深川市）
- 16) 11月2日 上川総合振興局（旭川市）
- 17) 11月2日 名寄産業高校（名寄市）
- 18) 11月4日 更別農業高校（更別村）
- 19) 11月4日 帯広農業高校（帯広市）
- 20) 11月10日 美唄尚栄高校（美唄市）
- 21) 11月11日 士幌農業高校（士幌町）
- 22) 11月11日 清水農業高校（清水町）
- 23) 11月11日 富良野緑陽高校（富良野市）
- 24) 1月25日 滝川市産業振興部農政課（滝川市）
- 25) 1月26日 砂川市産業振興部農政課（砂川市）

(2) 事業課との打合せ

- 1) 10月23日
相手方：農政部農業経営課
場所：道庁

(3) 専門委員会開催内容

- 1) 研修事業運営委員会の構成（令和2年4月現在）
委員長：三好智明（研究部長）
委員：横尾修・市川雅一（総務課）、大宮知・柳田大介・地子立（花き野菜G）、上野達・佐々木純（生産技術G）、大久保進一（技術研修G）
オブザーバー：川口招宏（上席普及指導員）、鹿野理（主任普及指導員）
事務局：古館明洋・齊藤優子・北村憲吾（技術研修G）
- 2) 開催内容
 - ① 第1回委員会（4月16日）
 - ア) 協議事項
・研修事業運営委員会規程の改正について
・2021年度花き・野菜技術研修（総合・専門）募集要領について
・2020各種セミナー・研修について
 - ② 第2回委員会（9月10日）
 - ア) 協議事項
・R2年度品目別セミナーについて
・R2年度ベーシックセミナーについて
 - ③ 第3回委員会（11月6日）
 - ア) 協議事項
・R2年度品目別セミナー「花きセミナー」について
・R2年度ベーシックセミナーについて
 - ④ 第4回委員会（12月24日）
 - ア) 協議事項
・R2年度新技術セミナーの開催について
・「花きセミナー」開催に向けた状況報告
・R3市民園芸セミナー開催内容の検討
 - イ) 報告事項
・ベーシックセミナーの中止について
・にんにくセミナー2020の中止について

⑤ 第5回委員会（1月28日）

ア) 協議事項

- ・ R2年度 新技術セミナーの開催について
（発表課題の確認ほか）
- ・ 「市民園芸セミナー」の取り扱いについて

⑥ 第6回委員会（3月24日）

ア) 協議事項

- ・ R3年度 総合技術研修について
- ・ R3年度 専門技術研修について
- ・ 令和4年度「北海道花き・野菜技術研修募集要領」の見直しについて

イ) 報告事項

- ・ 「新技術セミナー2021」の開催結果

3. 北海道花き・野菜技術研修

(1) 専門技術研修

新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

(2) 総合技術研修

新型コロナウイルス感染拡大防止のため開講後まもなく中止。

1) 期間 4月9日～4月14日

2) 受講者数 花きコース 1名
野菜コース 4名

3) 総合技術研修の受講者

氏名	所属等	備考
竹内 大和	本別町	花きコース
富樫 伶央	北見市	野菜コース
戸田 陽介	江別市	野菜コース
岡 尚汰	月形町	野菜コース
市橋 明日香	本別町	野菜コース

(3) 基礎技術研修（ベーシックセミナー）

新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

4. 研修ほ場等作付概要

区分	品目	品種	作型
	アスパラガス	スーパーウエルカム、ガインリム、ゼンユウガリバー	春どり露地（定植7年目）

注）総合技術研修共通栽培品目のみ掲載。

(4) 課題解決研修

農業試験場が開発した技術や品種の迅速な普及定着、生産技術の高位平準化、産地の育成等を目的とした各種セミナーを開催した。

1) 花・野菜新技術セミナー2021

◇開催日時 令和3年2月19日～3月19日

◇配信先 YouTube 動画配信

◇内容

①暖房を使わずハウスで野菜を1年中作る

講師：上川農試 主査(畑作園芸) 高濱雅幹

②クリスマスに美味しい道産メロンを届ける

講師：花野技セ 主査(野菜) 柳田大介

③大小ないちご『ゆきキラ』の上手な作り方

講師：花野技セ 主査(施設) 地子 立

④エチレンでたまねぎ長持ち

講師：花野技セ 研究主査 野田智昭

⑤暑い夏でも花もちキープ！切り花の輸送技術

講師：花野技セ 主査(花き) 大宮 知

⑥加工用トマトの品種特性

講師：花野技セ 専門研究員 平井 泰

⑦加工用トマトの疫病対策

講師：花野技セ 研究主任 藤根 統

2) ニンニクセミナー

新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

◇予定開催日時 11月19日

◇予定開催場所 たきかわ文化センター

(5) 市民セミナー

新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

(6) その他の研修

新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

VI 研究発表並びに普及事項

1. 研究報告・資料

(1) 研究報告

○Sawada, H., Fujikawa, T., Nishiwaki, Y., Horita, H. *Pseudomonas kitaguniensis* sp. nov., a pathogen causing bacterial rot of Welsh onion in Japan. *International Journal of Systematic and Evolutionary Microbiology*. 70 : 3018-3026(2020).

○Sawada, H., Horita, H., Nishimura, F., Mori, M. *Pseudomonas salomonii*, another causal agent of garlic spring rot in Japan. *Journal of General Plant Pathology*. 86:180-192(2020).

○Sawada, H., Fujikawa, T., Horita, H. *Pseudomonas brassicae* sp. nov., a pathogen causing head rot of broccoli in Japan. *International Journal of Systematic and Evolutionary Microbiology*. 70 : 5319-5329(2020).

○堀田治邦. 北海道で発生したフリージアモザイク病. *北農*. 87 : 210-212(2020).

○堀田治邦. 北海道で発生したサンダーソニア条斑モザイク病. *北農*. 87 : 213-215(2020).

○堀田治邦. 北海道で発生したミョウガのモザイク病. *北農*. 87 : 278-280(2020).

○森 志郎・安藤大輔・帰山敏亮・大宮 知. 分球性ユリ‘きたきらり’の球根養成期間における時期別温度遭遇が球根の品質に及ぼす影響. *園芸学研究*. 19 : 247-252 (2020).

○藤根 統・新村昭憲. 北海道の蒸気式催芽における食酢を利用したイネ褐条病およびイネ苗立枯細菌病の防除. *北日本病害虫研究会報*. 71:1-6(2020).

○Jayasinghe, W.H., Kim, H., Sasaki, J., Masuta, C. Aphid transmissibility of onion yellow dwarf virus isolates with an N-terminal truncated HC-Pro is aided by leek yellow stripe virus. *Plant Pathol.* 87.178-183 (2021).

(2) 口頭発表

○林 哲央・南辻牧子・平石留偉・小坂善仁. 北海道のハウス栽培におけるパプリカの無機養分吸収特性. *日本土壌肥料学会講演要旨集*. 66 : 113 (2020).

○地子 立・岡元英樹. 葉菜類の冬春連続無加温栽培における2作目不耕起定植の試み. *北海道園芸研究談話会報*. 54 : 12-13 (2021).

○佐々木純・増田 税・古田和義・高橋春南・古川勝弘・佐々木大介. 2019-2020 年の北海道におけるニンニクのモザイク病の発生調査. *日本植物病理学会報*. 87:27 (2021).

○古田和義・佐々木純・増田 税. FITC 標識プライマーによる RT-PCR 法とマクロアレイ法を組み合わせたニンニクウイルスの2段階検定法の開発. *日本植物病理学会報*. 87:27 (2021).

○Wikum H. Jayasinghe (北大院農・ペラデニヤ大学)・Hangil Kim (北大院農)・June Sasaki (花野技術)・Chikara Masuta (北大院農). N 末端に欠失がある HC-Pro をもつタマネギ萎縮ウイルスはリーキ黄色条斑ウイルスにアブラムシ伝搬を依存する. *日本植物病理学会報*. 87:24 (2021).

○佐々木純・増田 税・古田和義. 北海道におけるニンニクのリーキ黄色条斑ウイルスの発生分布. *日本植物病理学会大会*. (2021. 3. 17-19) .

(3) 著書・資料

○柳田大介. 北海道野菜地図(その44). 北海道野菜地図編集委員会(北海道農業協同組合中央会、ホクレン農業協同組合連合会)共著.(2021).

○大宮 知. 北海道フラワーガイド(その29). 北海道フラワーガイド編集委員会(北海道農業協同組合中央会・ホクレン農業協同組合連合会)共著.(2021).

○野田智昭・吉田慎一・印南亨哉. 北海道におけるMAフィルムを用いた青果物流通の試み. “食品容器包装の新しいニーズ、規制とその対応”. 情報技術協会編. 同発行. 297-304(2020).

○大久保進一. トマトの生産技術2章トマト産地の事例「事例1 北海道」北海道における生産の現状と展望. 中野明正編著. 誠文堂新光社発行. 88-97(2020).

(4) 専門雑誌・記事等

○堀田治邦. 基本からわかる農業と環境問題ー北海道におけるクリーン農業の取り組みー. *ニューカントリー*. 67(4) : 74-75 (2020).

○三好智明. 北海道農業の技術・経営を支える「道総研農業研究本部」の8つの試験場. *農家の友*. 73(2) : 4-6 (2021).

- 柳田大介. ピックアップ「たまねぎ」～栽培方法. ニューカンントリー. 67(5) : 103-105 (2020).
- 柳田大介. ピックアップ「なす」～栽培方法. ニューカンントリー. 67(8) : 95-97 (2020).
- 大宮 知. 高温期の道外移出に対応した草花類の品質管理技術. 農家の友. 72(8) : 40-42 (2020).
- 大宮 知. 高温期の道外移出でも外観と花持ちを維持. ニューカンントリー. 67(8) : 50-51 (2020)
- 地子 立. ピックアップ「アスパラガス」～栽培方法. ニューカンントリー. 67(7) : 97-99 (2020).
- 地子 立. 明日からアスパラ～道内の栽培の現状と課題. ニューカンントリー. 68(3) : 12-14 (2021).
- 柳田大介. 農学校1年1組「とうもろこしの時間」～品種解説. ニューカンントリー. 68(3) : 42-43 (2021)
- 小宮山誠一. 農業・農村の現場から「レアフル」で美味しい果実を一年中！－常温長期保管が可能な果実加工品で高付加価値化－. 農業. 1667 : 47-51 (2020)
- 小宮山誠一. 新しい加工品「レアフル」による果実の高付加価値化. 農業電化. 2021 別冊特集号 : 2-7 (2021)
- 小宮山誠一. 農産物の新規用途開発および輸送技術開発「レアフル技術の開発と事業化」. 北農. 87(4) : 42-49 (2020)
- 藤原孝之・乾良充・池永充伸・小宮山誠一・柳原哲司. セイヨウナシ‘パートレット’およびチュウゴクナシ‘千両’のセミドライフルーツ加工適性. 日本食品科学工学会誌. 67 卷(10) : 384-391 (2020)
- 佐々木純. イチゴの高設栽培の低濃度エタノールを使った培土の還元消毒による萎黄病の防除. 農家の友. 72(6) : 79-81 (2020).
- 藤根 統. 露地で加工用トマト問題となる病害虫と対策. ニューカンントリー. 67(8) : 17-19 (2020).
- 藤根 統. 露地加工用トマトの疫病防除. 農家の友. 72(8) : 36-38 (2020).
- 佐々木純. エタノールで培土を還元消毒し萎黄病防除. ニューカンントリー. 67(10) : 44-45 (2020).
- 藤根 統. 第8章土壌病害虫防除への利用. ニューカンントリー秋期増刊号「北海道の作物管理」. (2020).
- 野田智昭・吉田慎一・印南亨哉. MA フィルムを用いたアスパラガス、スイートコーンの流通技術. 農家の友. 72(9) : 76-78 (2020).
- 野田智昭・吉田慎一・印南亨哉. MA フィルムを用いたアスパラガス、スイートコーンの流通技術. ニューカンントリー. 67(5) : 54-55 (2020).
- 野田智昭・吉田慎一・印南亨哉. MA 包装によるブロッコリーの低コスト流通技術. 北農. 87(4) : 50-54 (2020).
- 吉田慎一・印南亨哉・野田智昭. MA 包装によるスイートコーン、アスパラガスの高鮮度輸送技術. 北農. 87(4) : 55-61 (2020).
- 加藤淳・高濱雅幹・野田智昭. 紫さつまいもの生育環境がアントシアニン発言量におよぼす影響. コミュニティーケア教育研究センター年報 地域と住民. 4 : 87-88 (2020)
- 大久保進一. 養液栽培システム‘ういず One’によるトマト栽培法. 施設と園芸. 189 : 50(2020).
- 齊藤優子. 潮流’20 変わる農業教育【社会人編】花・野菜技術センター. ニューカンントリー. 67(9) : 36-37(2020).
- 齊藤優子. 【広告】北海道花き・野菜総合技術研修. ニューカンントリー. 67(10) : 25(2020).
- 齊藤優子. 【広告】北海道花き・野菜総合技術研修. 農家の友. 72(11) : 17(2020).
- 齊藤優子. 【広告】北海道花き・野菜総合技術研修. 農家の友. 72(12) : 78(2020).
- 齊藤優子. 【広告】北海道花き・野菜総合技術研修. 農家の友. 73(1) : 51(2021).
- 大久保進一. ミニトマト[栽培方法] 1花房当たり50果程度になるように摘花. ニューカンントリー. 67(10) : 54-56(2020).
- 古館明洋. 早わかり「施肥ガイド2020」【畑作物】改訂のポイントと活用方法. ニューカンントリー. 68(2) : 20-22(2021).

(5) 新聞記事・広報誌、放送等

- 堀田治邦. 農村暮らしと地域のつながり. あぐりさろん 21. Vol.76 (2020).
- 堀田治邦. センメルワイズ反射. 有機農研. 122号 (2020).
- 大宮 知. 高温期の道外移出に対応した草花類の品質管理技術. 日本農業新聞. 3月19日号 (2021).
- 佐々木純. イチゴ高設栽培 低濃度エタノールを使った培土還元消毒法. 農業共済新聞. 11月18日号 (2020).

- 藤根 統. 蒸気式催芽でも食酢を使って稲の細菌病を予防. 農業共済新聞. 11月25日号(2020).
- 野田智昭. MA包装フィルムを用いたアスパラガス、スイートコーンの流通技術. 農業共済新聞. 5月1日号(2020).

(6) 出願公表

該当無し

(7) 品種登録

- いちご (Fragaria L.) 「ゆきララ」. 出願番号31527. 登録番号28185. 出願日2016年10月11日. 出願公表日2017年1月30日. 登録および登録公表日2020年11月19日. 育成者: 木村文彦. 福川英司・地子 立・中田優貴・黒島 学・田縁勝洋.

(8) 受賞

該当無し

2. 印刷刊行物

- 野津あゆみ. タマネギ灰色腐敗病の病原菌と防除に関する研究. 北海道立総合研究機構農業試験場報告. 150:1-46(2021)

3. 普及事項

(1) 普及奨励事項

- 無加温パイプハウスを用いた野菜の周年生産技術

(2) 普及推進事項

該当無し

(3) 指導参考事項

- 冬季出荷を目的とした長期冷蔵貯蔵メロンの品質基準と栽培法
- いちご「ゆきララ」の安定生産技術
- 加工用トマトの品種特性
- エチレン処理によるたまねぎの貯蔵期間延長技術

- たまねぎに対する除草剤「HSW-1801フロアブル」(雑草発生前処理)の実用化

- たまねぎに対する除草剤「HSW-1801フロアブル」(雑草発始処理)の実用化

- たまねぎの灰色腐敗病に対するインピルフルキサム水和剤Fの効果

- メロンのうどんこ病に対するキノキサリン系水和剤Fの効果

- 未成熟とうもろこしのカメムシ類に対するスルホキサフロル水和剤DF(未登録)の効果

- 未成熟とうもろこしのカメムシ類に対するフェンバレート・MEP水和剤(未登録)の効果

- すいかのハダニ類に対するフルキサメタミド乳剤の効果

- すいかのハダニ類に対するアシノナピル水和剤Fの効果

- メロンのハダニ類に対するフルキサメタミド乳剤の効果

- ミニトマトのミカンキイロアザミウマに対するフルキサメタミド乳剤の効果

- ミニトマトのオンシツコナジラミに対するフルキサメタミド乳剤の効果

- チンゲンサイのキスジトビハムシに対するブロフラニリド水和剤Fの効果

(4) 研究参考事項

該当無し

Ⅶ その他

1. 職員の研修

(1) 職場外研修（階層別、能力開発）

受講者	研修項目	実施機関	場所	期間
齊藤 優子	会計制度研修	道総研本部	Web	2. 4. 20
北村 憲吾	会計制度研修	道総研本部	Web	2. 4. 20
齊藤 優子	新任係長級研修	道総務部	札幌市	2. 7. 2- 3

(2) 職場研修等（集合・伝達研修）

研修等	実施月日	内 容	人数
伝達研修	5. 29	農作業安全研修（注意喚起含む）	28人
職場研修(倫理研修)	10. 14	倫理、労働災害、業務車による事故	27人
職場研修	12. 23-1. 12	情報セキュリティ研修	31人
伝達研修	2. 2	飲酒運転再発防止の徹底について	27人
伝達研修	2. 22	一般事業主行動計画に係る研修	27人
伝達研修	2. 26	情報セキュリティ対策及び交通事故等の防止(転倒・スリップ)	27人

2. 見学・参観

新型コロナウイルス感染拡大防止に伴い、令和2年度（2020年度）の見学・視察等の受け入れは中止。

3. 研修生の受入れ（研修事業以外）

(1) 普及指導員研修

1) 専門技術研修（野菜） 6/29～7/3

研修項目	対象者	担当
主要野菜の現場対応に必要な課題解決手法の習得	新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止	技術普及課、技術普及室 技術研修G、花き野菜G 生産技術G

2) 専門技術研修（花き） 6/29～7/3

研修項目	対象者	担当
主要花きの現場対応に必要な課題解決手法の習得	新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止	技術普及課、技術普及室 技術研修G、花き野菜G 生産技術G

3) 高度専門技術研修（野菜） 6/15～19, 7/27～31, 8/31～9/4

研修項目	対象者	担当
野菜栽培に係る新技術および調査研究手法の習得	新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止	技術普及課、技術普及室 技術研修G、花き野菜G 生産技術G

4) 高度専門技術研修（花き） 6/15～19, 7/27～31, 8/31～9/4

研修項目	対象者	担当
花き栽培に係る新技術および調査研究手法の習得	新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止	技術普及課、技術普及室 技術研修G、花き野菜G 生産技術G

5) 新任者早期養成研修（新任者Ⅱ） 11/7～9

研修項目	対象者	担当
自己課題研修の進捗確認と普及指導能力の向上	空知南東部支所 本間雅之ほか、新任2年目の普及職員 14名	技術普及課、技術普及室

4. 委員会活動

(1) 各専門委員会の構成

委員会名	委員長	事務局	委員
業務委員会	技術研修G 研究主幹	—	市川雅一（総務課）、大宮 知（花き野菜G）、 野田智昭、藤根 統（生産技術G）、 南 貴夫、玉川 忠（技術研修G）
環境整備委員会	花き野菜G 研究主幹	—	高崎真利奈（総務課）、佐々木純（生産技術G）、 大久保進一（技術研修G）
図書委員会	生産技術G 研究主幹	—	市川雅一（総務課）、柏谷太亮（花き野菜G）、 上野達（生産技術G）、北村憲吾（技術研修G）
研修事業運営委員会	研究部長	技術研修G 古館明洋、 齊藤優子、 北村憲吾	横尾修、市川雅一（総務課）、大宮 知、柳田大介、 地子 立（花き野菜G）、上野 達、佐々木純（生産技 術G）、大久保進一（技術研修G） オブザーバー：川口招宏、鹿野 理（技術普及室）
情報システム委員会	生産技術G 研究主幹	—	横尾修（総務課）、平井 泰（花き野菜G）、 佐々木純（生産技術G）、大久保進一（技術研修G）

（令和2年4月1日現在）

(2) 活動内容

1) 業務委員会

ア. 委員会の開催

- ・通常：4月2日～11月26日、毎週1回
- ・冬期：11月30日～3月26日、毎月1回
- ・拡大：中止

イ. 主な検討事項

- ・週間・月間作業計画
- ・ほ場、ハウス、温室等施設の利用計画
- ・ほ場の整備工事（排水路、暗渠）
- ・ハウスの張り替え計画

ウ. 主催行事

- ・蒔付祝い 中止

- ・収穫祭 中止

2) 環境整備委員会

ア. 委員会の開催

- ・第1回（令和2年4月22日）：十勝道路沿いゴミ拾い、花壇チューリップ掘上後の整備
- ・第2回（令和2年5月21日）：花壇管理の永年性花木（ラベンダー）への変更

イ. 庁舎前花壇

- ・チューリップ片付け（6/15）
- ・マリーゴールド等定植（6/23）
- ・片付けと堆肥施用（9/9）
- ・ラベンダー定植（9/15）

ウ. 旧十勝道路沿いゴミ拾いは、滝川市役所のク
リーンデー中止に連動して中止

3) 図書委員会

ア. 委員会の開催

- ・第1回委員会(令和2年6月26日): 規程改
定、予算執行予定、活動案の策定
- ・第2回委員会(令和3年3月18日): 活動総
括、次年度の計画、年報執筆依頼

イ. 見学案内に関すること

- ・見学案内資料の作成(中止)
- ・見学案内リハーサルの開催(中止)

ウ. 場の広報に関すること

- ・平成31(令和元)年度年報の作成(令和2年7
月3日)
- ・場紹介パンフレットの改定(令和2年11月10
日)
- ・ロビー設置ポスターおよびちらしの展示・更新
(技術研修Gにて実施)

エ. 図書の整備(購入)および管理に関すること

- ・図書資料の受け入れ
- ・図書資料の購入

4) 研修事業運営委員会

V 研修事業の概要参照

5) 情報システム委員会

ア. 委員会の開催

- ・第1回委員会(令和2年7月28日): 委員長・
委員の選出、規約改定、ウェブサイトの修正

イ. 法人情報システム(含むホームページ)の管
理・運営に関すること

- ・道総研ウェブアクセシビリティに対応したホー
ムページの修正
- ・場代表アドレスの管理(研究部長対応)

5. 公開デー2020

新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

6. 講師等の派遣

○堀田治邦. 花き・野菜の試験研究について. 令
和2年度 農大稲作経営専攻コース1年生集中講
義II(2020.9.1)

○堀田治邦. 診断から始まる農業病虫害の実用研
究. 鹿児島大学大学院連合農学研究科 2020年度
「人材養成学生支援セミナーI」(Web)

(2020.12.16)

○地子 立. 農業実習指導. 岩見沢農業高等学校
(2020.7.13)

○柳田大介. たまねぎの育種と栽培について. 岩
見沢農業高等学校(2020.9.10)

○柳田大介. 特別講義「医食農連携のススメ」.
東京農業大学生物産業学部(2020.10.20)

○小宮山誠一. 食品開発論(農産食品1-3回)非
常勤講師. 藤女子大学(2020.5-6).

○小宮山誠一. 第9回撰大農学セミナー 地域農
産物を活用した加工食品の開発と普及「新たな加
熱殺菌済み果実加工品「レアフル」の開発と普
及」. 撰南大学(2021.2.1).

○佐々木純. いちごの高設栽培における低濃度エ
タノールを用いた土壌還元消毒による萎黄病の防
除対策. 日胆いちご栽培情報交換会.
(2020.11.10).

○野田智昭. 施設を利用した予冷、貯蔵による農
産物の鮮度保持. 北海道立農業大学校
(2020.11.16)

7. 各種委員

○三好智明. 北海道園芸研究談話会幹事長.

○林 哲央. 北海道園芸研究談話会総務幹事.

○林 哲央. 北海道施肥ガイド改訂委員.

○林 哲央. 北海道農作物病虫害・雑草防除ガイ
ド作成検討委員

○柳田大介. 北海道野菜地図編集委員.

○大宮 知. 北海道フラワーガイド編集委員

○大宮 知. 北海道花き懇話会監事

○三好智明. 北海道さつまいも懇話会事務局長.

○上野 達. 北海道さつまいも懇話会事務局

○野田智昭. 北海道さつまいも懇話会事務局

○小宮山誠一. 日本食品科学工学会北海道支部運
営委員

○小宮山誠一. 土壌肥料学会北海道支部「北海道
農業と土壌肥料2021」編集委員

○古館明洋. 北海道施肥ガイド改訂委員会.

○大久保進一. 地熱・温泉熱アドバイザー. 北海
道経済部.

Ⅷ 自己点検への対応

事 項	件数等		
	R2	R1	H30
各機関へ直接寄せられたニーズ把握件数	0	0	0
研究成果発表会・企業向けセミナーの開催件数	1	0	4
同参加者数	900	0	538
研究会等の開催件数	0	0	0
展示会等への出展件数	1	2	0
研究報告書の発行件数	0	0	0
技術資料の発行件数	1	0	0
その他紙媒体発行件数	0	0	0
普及組織との連絡会議等開催件数	0	10	15
企業等へ訪問し広報活動した件数	0	10	8
行政や企業等で活用された成果の数	0	2	0
設備使用の件数	0	0	0
研究成果発表会・企業向けセミナーによる公表件数	0	6	10
研究会における公表件数	0	0	0
学会誌等への投稿件数①学会誌	6	2	8
学会誌等への投稿件数②雑誌（専門誌、商業誌）	26	16	14
学会誌等への投稿件数③書籍	1	2	2
学会誌等への投稿件数④新聞	2	5	0
学会誌等への投稿件数⑤その他	2	0	1
研究報告書での発表件数	0	1	1
学会やシンポジウム等での発表件数	5	7	8
ホームページ等による公表件数	0	0	0
プレスリリース、定例報道懇談会の件数	0	1	7
学会役員・委員件数	7	7	7
技術相談の実施件数	265	156	197
技術指導の実施件数	7	23	4
講師等派遣の実施件数	4	9	15
技術審査の実施件数	0	1	0
研修会・講習会の開催件数	1	4	10
同参加人数	web	196	689
研修者の受入人数	0	55	39
道関係部との連絡会議等の開催件数	14	3	5
市町村との意見交換等の開催件数	4	1	1
関係団体との意見交換等の開催件数	2	0	2
道民意見把握調査の回答数	0	216	388
出前授業の実施件数	0	1	0

事 項	件数等		
	R2	R1	H30
国内研修Ⅱ（外部講師招聘・受け入れ件数）	0	0	0
国内研修Ⅰの派遣件数	0	0	0
国内研修Ⅱの派遣件数	0	0	5
道民向けイベントの開催件数	0	3	1
同参加人数	0	228	233
国際協力事業等への協力件数	0	6	3
同参加人数	0	88	23
災害等に関係した技術指導件数	0	0	0
災害等に関係した委員派遣人数	0	0	0
ホームページ発信・更新件数	6	9	14
メールマガジン発信件数	1	0	0
フェイスブック発信件数	1	0	0
その他電子媒体発信件数	1	0	0
職場研修実施件数	6	8	3
グリーン購入の金額（千円）	2,704	1,489	3,597
視察・見学者の受入件数	0	25	18
同人数	0	392	325

ISSN 1346-7506

令和2年度(2020)

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構
花・野菜技術センター年報

令和3年6月 発行

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構
農業研究本部 花・野菜技術センター

〒073-0026 北海道滝川市東滝川735番地
Tel. 0125-28-2800(代表・総務課)
Tel. 0125-28-2291(花き野菜グループ)
Tel. 0125-28-2292(生産技術グループ病虫)
Tel. 0125-28-2293(生産技術グループ栽培環境)
Tel. 0125-28-2211(技術研修グループ)
Tel. 0125-28-2212(技術普及室)
Fax. 0125-28-2165 (総務課)
Fax. 0125-28-2299 (研究部、技術普及室)
